



大井川とトーマス号＝島田市、全日写連・前田圭三さん撮影

リニアと政治判断

一筆
静岡の今
101

コロナ禍の中で、このところ静岡県民の最大ニュースになっていたりニア中央新幹線問題について、全国紙の朝日新聞が6月27日付朝刊(東京本社発行)の1面トップで報じた。リニアにかかわる静岡県内の問題

が全国に拡散されたことになる。

その節目となった出来事は、静岡県知事室で前日行われた川勝平太知事とJR東海・金子慎社長による初めての「トップ会談」だった。知事室は県庁東館の5階にある。室内には知事席と応接セットがあり、県政の心臓部である。

リニア工事をめぐって

は、南アルプストーンネル工事の静岡県内工区を巡って両者の話し合いがつかず、「6月中旬に準備工事に着手できなかったら、予定する2027年の開業が難しい」(JR東海)とされていた。初の「トップ会談」に、事態の進展が期待された。

約1時間20分の会談は県ホームページを通じて、異例の同時動画配信がなされた。しかし物別れに終わり、準備工事の月内着手を求めた金子社長が持ち帰ったのは、「大井川の水の幸」(川勝知事)である牧之原産のお茶と、県産銘酒「磯自慢」の知事土産だけだった。

多くの県民にかかわる大事業は「公益」と「私権」が衝突することが多い。そのどちらを優先させるか、時の政治的判断が求められる。筆者が県監査委員をしていた09年2月、富士山静岡空港の開港予定が迫る中、知事室で石川嘉延知事(当時)は地権者の一人と対峙していた。測量ミスなどで私有地にある立ち木が航路を妨げて開港を遅らせていた。トップ会談で地権者は立ち木の伐採と引き換えに知事の辞任を要求。同年6月、知事が辞任して空港は開港した。

雨期で水量が増した大井川の流れに沿って、大井川鉄道の「きかんしゃトーマス号」が走っている。リニア工事が渋滞する中で、時速約30kmの蒸気機関車(SL)が子供たちの夢を運んでいる。

(前静岡県監査委員・富永久雄)